

地域計画特論(1) 宗教的価値観と社会計画

■宗教的価値観

■宗教・哲学・思想

■唯物論と観念論

■キリスト教についての整理

■西洋近代科学

■宗教的価値観

宗教とは

人間共通の疑問⇒
ひとはどうして生きているのか
死んだらどうなるのか
なんで宇宙があるのか
なんで勉強をする意味があるのか
だれにお願いをすればいいのか
だれが世界をコントロールしているのか
世界の苦しみはなくなるのか

これらの回答を知るために「宗教」を考えた

上記のような悩みのない人には「宗教」はいらない。

⇒ 社会情勢の複雑化 ⇒ 何をしてもいいかわからない(不安)
アイデンティティの欠如

■宗教とは

宗教(広辞苑第4版)

神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに対する信仰・行事。またそれらの連関的体系。帰依者は精神的共同社会(教団)を営む。アミニズム・自然崇拜・トーテミズムなどの原始宗教から、呪物崇拜・多神教などの形態を経て、今日の世界的宗教すなわち仏教・キリスト教・イスラム教などに至るまで、文化段階、民族などにより多種多様。多くは教祖・経典・教義・典礼などを何らかの形で持つ。



■宗教的価値観

一般的な意味での「宗教」の定義(筆者の考え)

自分の人生を何らかの意味で、うまくコントロールできないとき:

なんで、こんなことになるんやろう?.

or

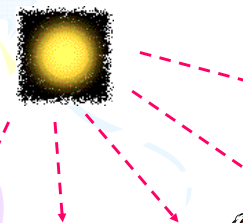
自分ではどうすることもできません!



このようなとき「超越した存在」を感じる?

超越した力はそれぞれの
宗教により表現が異なる

The God 神
The Universe 宇宙
etc.



■宗教・哲学・思想

思想(広辞苑第4版)

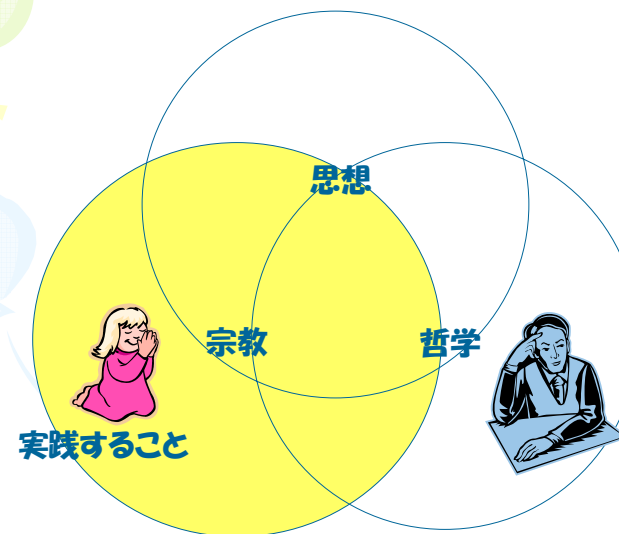
①考えられたこと、かんがえ、②【哲】(thought /Gedanke) 判断以前の単なる直観の立場に止まらず、このような直観内容に論理的な反省を加えた思惟の結果。思考内容。特に体系的にまとめたものをいう。

哲学(広辞苑第4版):philosophy

①愛智(ギリシャ)の意。西周が賢哲を希求するという意味から「希哲学」と訳したのが定着した。古代ギリシャでは学問一般を意味し、のちに諸科学の分化・独立によって哲学は世界・人生の根本原理を取り扱う学問となるが、単なる体験の表現や宗教ではなく、あくまでも理性的認識としての学的性格をもつ。

②俗に、経験などから築き上げた人生観・世界観。また全体を貫く基本的な考え方。

■宗教・哲学・思想の関係



■唯物論と観念論

【唯物論】(materialism)

①精神に対する物質の根源性を主張する立場。従って物質から離れた靈魂・精神・意識を認めず、意識は高度に組織された物質(脳髄)の所産であると考え、認識は客観的实在の脳髄による反映であるとする。唯物論は古くインド・中国にも見られるが、西洋では古代ギリシア初期の哲学者たち以来、近世の機械的唯物論(特に十八世紀のイギリス・フランスの唯物論)を経て、マルクス主義の弁証法的唯物論に至るまでさまざまな形態をとって、哲学史上絶えず現れている。

②通俗的用法としては、卑俗な处世法としての打算的・享楽主義的な態度を指す。

⇔観念論・唯心論。⇒反映論

【観念論】(idealism)

物質に対して観念的なものの根源性を主張する立場。

①イデアや宇宙的な精神を世界の根源とする形而上学説(客観的観念論)、古代・中世の観念論、カント以後のドイツ観念論など。

②バークリーのように、物質的世界の客観的实在性を否定し、世界は個人の主観の観念にすぎめと見る立場(主観的観念論)。

③経験的世界は超個人的認識主観が感覚的所与を構成することによって成立すると説くカントおよびカント学派の立場(先験的観念論)。

⇔唯物論・实在論。⇒唯心論

■もし地球に人類がいなくなったらどうなるか？

【想定】

現在の地球温暖化など ⇒ 人類は全滅する
核戦争が勃発する ⇒ 地球にだれもいなくなった



【唯物論的理解】

地球は依然として太陽の周りをまわっている
ゴキブリが地球の支配者になる
というわけで、宇宙的規模では何も変化したことはない

【観念論的理解】

ひとがいなくなったら「地球」「宇宙」の概念もなくなる
したがって、「地球」「宇宙」は存在しなくなる
ようするに、ひとがいなくなったら世界もなくなる

■ユダヤ教とキリスト教(1)

アラビアの砂漠地方の人々の地中海東岸地方への移住
(BC2000ごろ)

フェニキア人(北方)・イスラエル人(南方)

エジプト王朝でイスラエル人の迫害 ⇒ BC13世紀ごろ
モーゼ・出エジプト

神(ヤーヴェ) ⇒ モーゼの十戒
(神とイスラエル人の契約)「律法」

これらの話を描いたものが「旧約聖書」
創世記・出エジプト記・諸書(詩篇・箴言)、預言書(イザヤ書・
エレミヤ書)

ユダヤ教の厳格な律法主義・形式主義 ⇒ イエスの批判

■ユダヤ教とキリスト教(2)

キリスト＝「メシア」＝「救世主」(聖油を注がれた者)

「時は満ちた、神の国は近づいた」⇒「愛の神」
(ユダヤ教の神は「裁きの神」「義の神」)

ユダヤ教の正統派(サドカイ派・パリサイ派)の反感を買う。
ローマ帝国(パレスチナ)の政治的危険な人物

最後の晩餐 ⇒ エルサレム・ゴルゴダの丘



死後3日目に復活



これらの話を描いたものが「新約聖書」
マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ福音書、使徒行伝、書簡、ヨハネ
黙示録(預言書)

■関連地域図



■最後の晚餐



マグダラのマリアは、新約聖書の福音書に登場するイエスに従った女性。マグダラという地方で商売をしていた娼婦だという説もある。カトリック教会、東方教会などではいずれも聖人であり、その記念日は7月22日。マグダラのマリアは古来西方教会で非常に崇拝され、多くの伝説にいろどられている。福音書の中にはマグダラのマリアと特定されていない女性が何人が登場する。マグダラのマリアについて福音書がはっきりと語っていることは、悪霊に憑かれた病をイエスによって癒され、礎にされたイエスを遠くから見守り、その埋葬を見届けた。そして、復活したイエスに最初に立ち会った者の一人だということだ。



■キリストの復活(ヨハネ福音書20章)

- 11: マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、
- 12: イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。
- 13: 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」
- 14: こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。
- 15: イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのですから、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」
- 16: イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。
- 17: イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。「わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る」と。」
- 18: マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

■ユダヤ教・キリスト教・イスラム教

以上のことから、当然ながら…

ユダヤ教では キリスト＝単なる田舎の伝道者である

キリスト教では キリスト＝「神の子」「メシア」とする。
(キリストの復活を信じる教団)

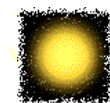
イスラム教では アッラーの神がこの世に多くの「預言者」を遣わして、人類に悔い改めるように警告された。旧約聖書中の預言者、イエス・キリスト…マホメット(最後の預言者)『コーラン』を啓示

まとめると: イエス・キリストは
ユダヤ教では …… 「ただの人間」
キリスト教では …… 「神の子」
イスラム教では …… 「預言者」



■キリスト教のイメージ

The Christianity system



The god



Jesus Christ



People

唯一神(ユダヤ教: ヤーヴェ)

神は預言者を通じて、ことばや意思を伝える

神が天地創造を行った。
7日目に休息した。(安息日)

ポイント

原罪

神は全知全能で、人間を超越した存在である。
人間は不完全で罪深い存在である。

人間は神に救済を求め、神はそれにこたえて人間との間に契約を結んだ。

人間は神にはなれない(当然)。

■キリスト教と西洋科学

実はわれわれが「科学」と思っているの「西洋科学」あるいは「キリスト教的近代科学」



たとえば、ニュートンは「プリンキピア」のなかで…

「私は仮説をつくらない」とのべている

$$f = ma$$

運動の法則、万有引力の法則など

しかしながら…時間と空間は人間の感覚を超えた(神の創造した)
「絶対的なもの」と考えていた

さらに………万有引力の原因(どのように伝わるのか)は、神の
直接の働きかけであると信じていた

■西洋科学の問題

神による万物の支配、唯一神と人間との対立の意識

宇宙は「神の与えた第二の聖書」とであるという考え

「最小の原理」…「自然は無駄なことをしない」

「保存の概念」…「創造は神のみ可能であるから、人間や
自然の力で破壊も創造もできない」

「質量保存」……「神が創造したものが消滅はしない」

「種の保存」……「神が創造した種は変化しない」

⇒「進化論」(ダーウィン)により否定された

キリスト教的世界観・人間観(西洋科学)は確かに多数の
近代的技術をもたらした。

■現代社会と欲望

ヒューマニズム＝人道主義(日本語訳) というが

キリスト教的世界観・人間観では「人間中心主義」が適当

…神と契約しているから、聖書に書いてあるから

「信じるものこそ救われる」…信じないものは?

近代科学がひとびとの生活を便利にし、快適にした。
よく考えると「人間の欲望の充足を目的に発展してきた」

その結果として、さまざま社会問題:環境破壊、脳死問題、
遺伝子問題、資源エネルギー問題……

わが国の問題:

キリスト教的思想なく西洋科学技術を受け入れた。

東洋的(日本的)自然観・人間観との関係を考えなかった。

■今回の参考文献

1. 渡辺正雄:科学者とキリスト教 ガリレイから現代まで、フルー
ボックス、講談社、1987.
2. 村上重良:世界の宗教 世界史・日本史の理解に、岩波ジュニア
新書、1980.
3. <http://www.gifu-u.ac.jp/~takamasa/Japanese.pdf>
4. ひろさちや:仏教とキリスト教 -どう違うか50のQ&A-、新潮
選書、1986.
5. 佐藤正英・片山洋之助共編著:新制チャート式シリーズ 新倫理、
数研出版、1998.